情 報

養殖コイで初めてみられた粘液胞子虫による腸管の腫瘍

北 上 一 男*

(昭和 54 年 10 月 30 日受理)

Intestinal Giant-cystic Disease Affecting the Carp, Caused by *Thelohanellus* sp.

Kazuo KITAUE

Ibusuki Branch of Kagoshima Prefectural Fish. Exp. Station, Ibusuki, Kagoshima, Japan

(Received October 30, 1979)

1978 年 9 月上旬、鹿児島県薩摩郡宮之城町の A 養鯉場より、斃死魚の病性鑑定依頼のため、ホルマリン漬にしたコイの腸管（魚体重約 600 g）の 2 年魚とのこと）が持ち込まれた。これをみると、腸管内壁に小指頭大から雀卵大の腫瘍が多数形成されており（写真参照）、腫瘍内には、粘液胞子虫類のテロハネルスと思われるナス型単極囊の胞子が無数に認められた。そこで、この標本を直ちに東大水産学科江草周三教授に送付して種の同定を依頼すると共に、同年 9 月 18 日、現地におもむき若干の調査を実施した。すでに流行期を過ぎていて患魚の採集も思うようにならず、充分な観察はできなかったのであるが、本病は我が国で未報告と思われるので、ここにその概要を報告する。

発生状況 問題の A 養鯉場は、宮之城東方約 3 km に位置し、川内川の支流穴川から引いた灌漑用水を使用している。養鯉歴は約 70 年と古く、飼育池 9 面（600 坪）で年間約 10 トンを生産している。このうちの 1 面（10 坪、水深 180 cm、30~600 g の食用鯉約 8,000 尾、約 850 kg 収容）のみに本病の発生がみられた。すなわち、7 月上旬（水温 23°C）から数尾ずつ死魚が続出しはじめ、7 月中旬より 8 月中旬（水温 28~29°C）にかけて連日 10~16 尾も死んだが、調査当日（水温 25°C）前後には 1 日 3~4 尾程度に減少し、その後の電話連絡では 10 月上旬に終息したとのことであった。

同日さらに、A 養鯉場東方 1~1.5 km 上流にある B・

C 養鯉場も調査した。B 養鯉場は A のそれと同一用水路の水を、C 養鯉場は全く別の水系から取水していたが、いずれの養鯉場でも、斃死魚または瀕死魚の腸管内に同様の腫瘍を認めた。しかし、A 養鯉場より 5 km 東方にある薩摩町内の養鯉場 2 ケ所では、本病の発生が認められなかった。

患魚の症状 上記 A・B・C 3 養鯉場で得られた調査結果を総合する。業者の話では、魚体重 70 g の 1 年魚から 5 kg の親魚まで本病によって斃死したとのことであったが、調査した斃死魚 3 尾と瀕死魚尾はいずれも 2 年魚（500~700 g）であり、これらすべての腸管内に粘液胞子虫による腫瘍（写真）が認められた。病魚は体色が薄く、頭部後方がやや凹んでいて背コケ状態を呈しており、瀕死魚において、動作緩慢、肛門の発赤、および肛門からの出血が観察された。開腹するとアンモニア臭のすることがあり、肉質は白っぽく脂肪分がなくてパサパサした感じを受けた。最大の病変は腸管にあり、これの膨潤化と腸管の菲薄透明化が目立った。腸管を切開すると、部位に関係なく数個ないし 20 数個の腫瘍（直径 2~20 mm）が認められた。本病の死因は、腫瘍による消化障害ではないかと思われる。

謝 辞

本調査実施にあたり種の同定、とりまとめについて御助言、御指導をいただいた東京大学教授江草周三博士並びに三共株式会社中央研究所中島健次博士に篤く御礼申しあげます。

* 鹿児島県水産試験場指宿内水面分場

コイ (1 年魚) の腸管内壁に形成された粘液胞子虫テロハネルスによる腫瘤 ($\times 0.7$)。
〔患魚は尾叉長 35 cm, 700 g, 1978 年 9 月 18 日鹿児島県宮之城町内養鯉場にて採捕〕